

公民科教育教材としての『臨濟録』

坂内 栄夫

《はじめに》

公民科指導要領には次のようにいわれている。即ち、「よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、人間としての在り方生き方についての自覚」を深める（「公民」目標）。つまり、「人間としての在り方生き方についての自覚」を深める事。そして、「人間としての在り方生き方に関わる事象や課題について主体的に追究したり、他者と共によりよく生きる自己を形成しようとしたりする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察やより深い思索を通して涵養される、現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚を深める。」（「倫理」目標）。即ち、「人間としての在り方生き方に関わる事象や課題について主体的に追究した」り、「人間としての在り方生き方についての自覚を深める」事が言われているのである。ここに言う「在り方生き方についての自覚を深める」事と「主体的に追究」するという、この二つの目標のための教材として、『臨濟録』を取り上げることにした。

『臨濟録』についての説明は後に譲るが、『臨濟録』は禅宗という宗教の語録であるからとか、仏教の教えを説いた書であるから、教材としてはふさわしくないのではないかと一般には考えられるかもしれない。しかし、そのような先入観を除いて、虚心に臨濟のことにばに耳をすませるならば、彼の主張は「仏」や「悟り」や「経典」など全てを否定しており、結局の所、自己を確立し主体的に行動することをひたすら強調する事に外ならない。そして、そこには現在の我々の生き方の指針となり得る事柄が、歯切れのよいことばで説かれているのを見いだすであろう。以下、臨濟の説いたことばを、現在の我々の指針となる内容について具体的に見てゆきたい。

凡例的な事を書いておくと、出所を示すため引用文の最後に、入矢義高訳注『臨濟録』（岩波文庫の頁数と柳田聖山『訓注臨濟録』補訂本（『柳田聖山集』第四巻）の分節数を付けている。また、口語訳は入矢義高訳による（一）。

まず、禅宗についてごく簡単に説明する。禅宗は、仏教の宗派なかの一つである。そもそも仏教とは仏陀と言われる、紀元前5世紀頃の人、ゴータマ・シッダールタが説いた教えが広まったものである。仏陀自身が説いた教えを、学問的に明らかにする事は不可能である。しかし、その教えを受けた原始仏教の教義からの類推から、あらゆる物を因果関係として捉える縁起説(2)や、人びとの苦しみを癒やすため四つの真理である四諦説(3)は説いたのではないかと言われている。

釈迦の死後100年を過ぎた頃から、釈迦の教えを継承していた教団が複数に分裂した。これを部派仏教という。そのうちの一つである上座部仏教は、釈迦以来の伝統を忠実に継承し、自らの悟りの成就に務める仏教であり、東南アジア地方、主にスリランカ・タイ・ミャンマー等の地域に広まり、現在も行われている。一方、紀元前後ころ、インドでは新たに大乘仏教運動が興った。大乘仏教とは、自らの悟りを求めるだけに止まらず、悟りを他の人々にも及ぼし救済しようとする仏教運動である。この大乘仏教はヒマラヤを越えて北方に伝わり、シルクロードを通じて東の中国・朝鮮・日本などに広まっていった。そして、この大乘仏教の中から禅仏教が興ってくるのである。

そもそも禅とは禅定の意味で心を安定させることである。仏教が生れる以前から古代インドで行われていた修行法である。仏教もそれを取り入れ、仏教徒が修めるべき三学(戒律・禅定(坐禅)・智慧(

学問)という基本的修行科目の一つ組み入れたのである。よって、仏教徒である限りはインドであると中国であるとを問わず、だれでもが坐禅を組み(禅定)、精神集中の修行を行っていたのである。しかし、中国ではインドからやってきた達摩が伝えた独自の教化法に促され、三学うちの禅定だけを特に重視し、他の二つをさほど重視しない宗派が興った。それが、禅宗である。つまり、禅宗とは中国に伝わった大乘仏教の中から、中国で興った独自の宗派なのである。なお、禅宗が中国で生れた(インドには存在しない)大乘仏教の一つである事を理解する事は、仏教思想を理解する上で重要な点だと思われる。

《臨済の生涯と『臨済録』》

次に臨済の伝記と彼の語録『臨済録』について簡単に見てみよう。臨済、姓は刑氏、諱は義玄(?~866)、曹州南華(山東省單県)の人。河北の臨済院に住持していたため、臨済と言われる。詳しい伝記は不明であるが、『臨済録』に述べる所によると、長安で唯識を学び、律に精通し、禅の教えを求めて各地を遍歴のち、江西の黄檗山に希運を尋ねる。参禅すること三年にして、黄檗の兄弟弟子たる大愚により悟りを開くという。その後、武宗による会昌の廃仏の頃(845~846)、鎮州(河北省正定県)の王常侍(王紹懿か?)に迎えられる、滹沱河の済(渡し場)に臨む臨済小院に道場を構える。

後世、臨濟禪師と呼ばれる所以である。しかし、彼が臨濟院で説法した期間は比較的短く、恐らく五十代で没したであろうと推測されている。

次に、『臨濟録』について見てみる。まず、師匠の言葉を纏めた禅語録についてであるが、禅の世界では一般に師匠の言葉を後生大事に抱えて有難がつている事は、望ましくないことだとされている。その事は、『臨濟録』中にも以下のように述べられている。

今の修行者がだめなのは、言葉の解釈で済ませてしまうからだ。大判のノートに老いぼれの坊主の言葉を書きとめ、四重五重と丁寧にくみに包み、人にも見せず、これこそ玄妙な奥義だと言って後生大事にする。大間違いだ、愚か者ども。お前達は干からびた骨からどんな汁を吸い取ろうというのか。

今時学人不得、盖為認名字為解。大策子上、抄死老漢語、三重五重複子裏、不教人見、道是玄旨、以為保重。大錯。瞎屨生、你向枯骨上、覓什麼汁。(P.121) 77節

しかし、実際には師匠の制止にも関わらず、密かに筆記された師匠の言葉が輯められて、やがて語録に成長していった例が多数存在していたと推測されている。そして、臨濟の語録についていえば、臨濟の没後すぐに、最初は王常侍によって語録の輯録が命じられたようである。その後、十世紀の後半頃には、『臨濟録』最初の古本定本というべきものが編纂されたようである。これについては、現在

資料は存在せず、詳細は不明である。その後、十一世紀前半には、先の古本定本とは異なる、現行の『臨濟録』とほとんど同一の新しい『臨濟録』新定本(『天聖広灯録』所収本)が編纂されている。現在の通行本『臨濟録』は、この『天聖広灯録』所収本と配列は異なるが内容には基本的に異なると所はない。

《臨濟の思想》

次に、臨濟の思想について見てゆきたい。幾つかの特徴的な言葉を取り上げて、彼の思想を概観する事にする。それぞれが関連しているために、各用語のみで完結している訳ではないが、行論の都合上便宜的処置であると了解されたい。

ではまず、臨濟が説法の時に強調してやまない、「人惑を受くるなかれ」(「莫受人惑」)から見ていくことにしたい。この「莫受人惑」の語は「人の言葉に惑わされるな」の意で、『臨濟録』では頻繁に見られる言葉である。幾つか例をあげる。

【莫受人惑】(「人の言葉に惑わされるな」)

今わしが君たちに言い含めたいことは、ただ他人のことばにまどわされるなということだけだ。自力でやろうと思つたら、すぐにやることだ。決してためらうな。このごろの修行者たちが駄目なのは、その原因はどこにあるか。その病因は自らを信じきれぬ点にあるのだ。自らを信じきれぬ

と、あたふたとあらゆる現象についてまわり、すべての外的条件に翻弄されて自由になれない（自らに由ることができない？）。もし君たちが外に向かって求めまわる心を断ち切ることができたなら、そのまま祖仏とおなじである。君たち、その祖仏と会いたいとおもうか。今わしの面前でこの説法を聴いている君こそがそれだ。君たちはそれを信じきれないために、外に向かって求める。しかし何かを求め得たとしても、それはどれもことばの上の響きのよさだけで、生きた祖仏の心は絶対につかめぬ。

如山僧指示人处、祇要你不受人惑。要用使用、更莫遲疑。如今学者不得、病在甚处。病在不自信处。你若自信不及、即便忙忙地徇一切境転、被他万境回換、不得自由。你若能歇得念念馳求心、便与祖仏不別。你欲得識祖仏麼。祇你面前聽法底是。学人信不及、便向外馳求。設求得者、皆是文字勝相、終不得他活祖意。(P.33) 27節

諸君、もし君たちがちゃんとした修行者でありたいならば、まずらおの気概がなくてはならぬ。人のいいなりなぐずでは駄目だ。ひびの入った陶器には醜醜を貯えておけないのと同じだ。大器の人であれば、何よりも他人に惑わされるまいとするものだ。どこでも自ら主人公となれば、その場その場が真実だ。

道流、你若欲得如法、直須是大丈夫兒始得。若萎萎随隨地、

則不得也。夫如「斯瓦」噉之器、不堪貯醜醜。如大器者、直要不受人惑。随处作主、立处皆真。(P.70) 49節

諸君、まともな見地を得ようと思うならば、人に惑わされてはならぬ。内においても外においても、逢ったものはすぐに殺せ。仏に逢えば仏を殺し、祖師に逢えば祖師を殺し、羅漢に逢ったら羅漢を殺し、父母に逢ったら父母を殺し、親類に逢ったら親類を殺し、そうして始めて解脱することができ、なにもものにも束縛されず、自在に突き抜けた生き方ができるのだ。

道流、你欲得如法見解、但莫受人惑。向裏向外、逢著便殺。逢仏殺仏、逢祖殺祖、逢羅漢殺羅漢、逢父母殺父母、逢親眷殺親眷、始得解脱、不与物拘、透脱自在。(P.96) 63節

まともな修行者であれば、一念一念がとぎれることはない。達磨大師がはるばるインドからやって来たのは、人に惑わされぬこう正念の人を求めんがためこそであった。

如真正作道人、念念心不间断。自達磨大師從西土来、祇是覓箇不受人惑底人。(P.124) 79節

このように臨済は何度も「人惑を受くること莫かれ」（人に惑わされてはならない）と強調している。つまり、他人の説く教えなどを信じて、それによって悟りを得ようとする考えは過ちである、とそのような心構えの修行者を厳しく批判しているのである。これは、人に頼ってはいけない、自らを信じて「自律的存在であれ」、「主体的

に行動せよ」と臨済は説いていると理解する事ができる。したがって、

もし君たちが外に向かって求めまわる心を断ち切ることができたなら、そのまま祖仏とおなじである。君たち、その祖仏と会いたいとおもうか。今わしの面前でこの説法を聴いている君こそがそれだ。君たちはそれを信じきれないために、外に向かって求める。しかし何かを求め得たとしても、それはどれもことばの上の響きのよさだけで、生きた祖仏の心は絶対につかめぬ。(P.33) 27節

などとあったように、我々は「人の言葉に惑わされない」でいなくてはならず、そして次の段階として「自らを信じよ」と臨済は説くのである。

【自信】（「自らを信じよ」）

いったい法とは何か。法とは心である。心は形なくして十方世界を貫き、目の前に生き生きと働いている。ところが人びとはこの事を信じきれぬため、文句を目当てにして、(菩提だの涅槃だのという)言葉の中に仏法を推し量ろうとする。天と地の取り違えだ。

云何是法。法者是心法。心法無形、通貫十方、目前現用。人信不及、便乃認名認句、向文字中、求意度仏法。天地懸殊。(P.47) 33節

自分を信じ切れないために、お経を頼りにして仏法を求めようと

する(自分の外に求めようとする)。それは間違いだと臨済は言う。

諸君、偉丈夫たる者は、今こそ自らが本来無事の人であると知るはずだ。残念ながら君たちはそれを信じきれないために、外に向かってせかせかと求めまわり、頭を見失って更に頭を探すという愚をやめることができない。

道流、大丈夫児、今日方知本来無事。祇為你信不及、念念馳求、捨頭覓頭、自不能歇。(P.56) 40節

今、仏道を学ぼうとする人たちは、ともかく自らを信じなくてはならぬ。決して自己の外に求めるな。そんなことをしても、あのくだらぬ型に乗っかるだけで、邪正を見分けることは全然できぬ。祖師がどうの、仏がどうのというのは、すべて經典の文句の上だけのことだ。

如今学道人、且要自信、莫向外覓。総上他閑塵境、都不辨邪正。祇如有祖有仏、皆是教迹中事。(P.67) 47節

諸君、ほかならぬ君自身が現にいま見たり聞いたりしているはたらきが、そのまま祖仏なのだ。それを信じきれぬために、外に向かって求めまわる。勘違いしてはならぬ。外に法はなく、内にも見つからぬ。しかし、こういうわしという言葉に飛びつくよりは、先ず何よりも静かに安らいで、のほほんとしていことが一番だ。

道流、是你目前用底、与祖仏不別。祇麼不信、便向外求。

莫錯。向外無法、内亦不可得。你取山僧口裏語、不如休歇

無事去。(P.99) 65節

わしは一日中すぱりと説いてやっているのに、お前達は一
向に氣にとめない。千べんも万べんも自分の足の下に踐ん
でいるそれは、真つ黒けで姿形は全くなくて、しかも独自
の輝きを発してありありと存在している。お前達はこれを
信じ切ることができず、いたずらに觀念の上で理解しよう
として、年が五十近くになつても、ひたすらその屍骸を脇
道へかつぎ、その荷物を背にして天下を走り回っている。

そんな事では死んだ後、閻魔に草鞋錢を請求される日がき
つとくるであろう。

山僧竟日与他説破、学者総不在意。千徧万徧、脚底踏過、
黒没煖地、無一箇形段、歴歴孤明。学人信不及、便向名句
上生解。年登半百、祇管傍家負死屍行、担卻担子天下走。

索草鞋錢有日在。(P.109) 70節

今の自分自身の心の働किが祖仏と変らない、完全に充足して欠け
るものがないものでありながら、それを自分で自分を信じ切れない
ために、お経を頼りにして仏法を求めようとする、自分の外に求め
ようとする。そんな修行者を批判していて、自らの価値に気付くと
臨済は言う。つまり、ここでも臨済は、他に自分の外によることな
く、自分自身を信じて行動することが第一であるといふのである。
即ち、「自律的に行動すること」が第一であると主張していると言え
よう。

一方、自分を信じきれないと言うことは、外に向かつて拠り所を
求める事になる。先に引いたように、臨済は以下の様に説いていた。

もし君たちが外に向かつて求めまわる心を断ち切ることが
できたなら、そのまま祖仏とおなじである。君たち、その
祖仏と会いたいとおもうか。今わしの面前でこの説法を聴
いている君こそがそれだ。君たちはそれを信じきれないた
めに、外に向かつて求めるのだ。(P.33) 28節 【莫受人

惑】参照

そこで臨済は、「外に求めまわる心をなくせ」(「歌得念念馳求心」)
と強調する。

【歌得念念馳求心】(「外に求めまわる心をなくせ」)

もし君たちが外に向かつて求めまわる心を断ち切ることが
できたなら、そのまま祖仏とおなじである。君たち、その
祖仏と会いたいとおもうか。今わしの面前でこの説法を聴
いている君こそがそれだ。君たちはそれを信じきれないた
めに、外に向かつて求める。しかし何かを求め得たとして
も、それはどれもことばの上の響きのよさだけで、生きた
祖仏の心は絶対につかめぬ。

你若能歌得念念馳求心、便与祖仏不別。你欲得識祖仏麼。
祇你面前聴法底是。学人信不及、便向外馳求。設求得者、
皆是文字勝相、終不得他活祖意。(P.33) 27節 【莫受人

惑】参照

わしがこのように説く目的はどこにあると思うか。君たちがあれこれ求めまわる心を止めることができずに、古人のつまらぬ仕掛けに取り付いているからだ。

山僧与麼説、意在什麼処。祇為道流一切馳求心不能歇、上他古人間機境。(P.40) 31節

君たちは、脇道の方を探しに行つて手助けを得ようとする。大間違いだ。君たちは仏を求めようとするが、仏とはただの名前である。君たちはその求め廻っている当人（がだれであるか）を知っているか。三世十方の仏や祖師が世に出られたのも、やはり法を求めんがためであつた。今の修行者諸君も、やはり法を求めんがためだ。法を得たら、それで終わりだ。得られねば、今まで通り五道の輪廻を繰り返す。

你擬向外傍家求過、覓脚手。錯了也。祇擬求仏、仏是名句。

你還識馳求底麼。三世十方仏祖出来、也祇為求法。如今参学道流、也祇為求法。得法始了。未得、依前輪廻五道。(P.47) 33節

諸君、偉丈夫たる者は、今こそ自らが本来無事の人であると知るはずだ。残念ながら君たちはそれを信じきれないために、外に向かつてせかせかと求めまわり、頭を見失つて更に頭を探すという愚をやめることができない。

道流、大丈夫児、今日方知本来無事。祇為你信不及、念念

馳求、捨頭覓頭、自不能歇。(P.56) 40節 【自信】参照
君たちがあらゆるところへ求めまわる心を捨てきれぬからだ。だから祖師も言った。「こら、立派な男が何をうろたえて、頭があるのにさらに頭を探しまわるのだ」と。この人一言に、君たちが自らの光を内に差し向けて、もう外に求めることをせず、自己の身心はそのまま祖仏と同じである」と知つて、即座に無事大安樂になることができたなら、それが法を得たというものだ。

為你向一切処馳求心不能歇。所以祖師言、咄哉丈夫、將頭覓頭。你言下便自回光返照、更不別求、知身心与祖仏不別、当下無事、方名得法。P.126 80節

人の言葉に惑わされず、自分自身を信じることから、自分以外の権威を求める・頼る心をなくすように臨済はいうのである。即ち、外在的権威を否定して、「自律的生き方」、「自律的人間」を指向押しているのである。そして、この「求める心」（馳求心）というのは、自分の外に抛り所を求める事を意味するので、「外に向つて求める心」（「向外」）を戒める事も、臨済はしきりに言う。

【向外不求】（「外に向つて求めるな」）

先に述べた「人惑」「自信」「馳求心」と言うことと、「向外不求」とは内容的に重なる事になるので、「人惑」「馳求心」等で引いた例と重複するが、以下の様に「外に向つて求めるな」と見えている。

君たち、その祖仏と会いたいとおもうか。今わしの面前で

この説法を聴いている君こそがそれだ。君たちはそれを信じきれないために、外に向かつて求める。しかし何かを求め得たとしても、それはどれも言葉の上の響きのよさだけで、生きた祖仏の心は絶対につかめぬ。

你欲得識祖仏麼。祇你面前聽法底是。学人信不及、便向外馳求。設求得者、皆是文字勝相、終不得他活祖意。P.33
27節

諸君、正しい見地をつかんで天下をのし歩き、そこいらの狐憑き禅坊主どもに惑わされぬことが絶対肝要だ。なにごともしない人こそが高貴の人だ。絶対に計らいをしてはならぬ。ただあるがままであればよい。君たちは、脇道の方に探しに行つて、手助けを得ようとする。大間違いだ。

道流、切要求取真正見解、向天下横行、免被這一般精魅惑乱。無事是貴人、但莫造作、祇是平常。你擬向外傍家求過、覓脚手。錯了也。P.46 33節

今、仏道を学ぼうとする人たちは、ともかく自らを信じなくてではならぬ。決して自己の外に求めるな。そんなことをしても、あのくだらぬ型に乗っかるだけで、邪正を見分けることは全然できぬ。

如今学道人、且要自信、莫向外覓。総上他閑塵境、都不辨邪正。P.67 47節

諸君、ほかならぬ君自身が現にいま見たり聞いたりしてい

るはたらきが、そのまま祖仏なのだ。それを信じきれぬために、外に向かつて求めまわる。勘違いしてはならぬ。外に法はなく、内にも見つからぬ。

道流、是你目前用底、与祖仏不別。祇麼不信、便向外求。莫錯。向外無法、内亦不可得。P.99 65節

偉丈夫ともあろう者が、偉丈夫の気概を示しもせず、自己に備わっている本来のものを信じようとせず、ひたすら外に向かつて求めまわり、古人のくだらない言葉を追っかけ、縁起をかつぎまわつて、独立独歩できず、境に逢えば境に引かれ、物に逢えば物に執らわれ、行く先々でおろおろして、さつぱり腰が定まらぬ。

大丈夫漢、不作丈夫氣息、自家屋裏物不肯信、祇麼向外覓、上他古人閑名句、倚陰博陽、不能特達逢境便縁、逢塵便執、触処惑起、自無准定。P.137 86節

以上のように、臨濟は「人に惑わされず」「自らを信じ」「求めまわる心」をなくし、「外に向かつて求め」ない人であれと説いている。つまり、自律的・主体的に生きよと説いているのである。そして、この後に修行者が取るべき態度としては、「自分の内部にも権威を措定せず」、「外部にも法を求めない」。ただ、「あたりまえに」（「平常無事」）に過ごしていけばよいのだと説いている。

わしの見地が格別で、外に凡聖の枠を認めず、内は根本の悟りに腰をすえず、そう徹見してさらさら疑われないからだ。

祇為我見処別、外不取凡聖、内不住根本、見徹更不疑謬。

P.49

法は心外にもなく、また心内にもない。いったい何を求めようというのか。

心外無法、内亦不可得、求什麼物。P.73

諸君、ほかならぬ君自身が現にいま見たり聞いたりしているのはたらきが、そのまま祖仏なのだ。それを信じきれぬために、外に向かつて求めまわる。勘違いしてはならぬ。外に法はなく、内にも見つからぬ。しかし、こう言うわしの言葉に飛びつくよりも、先ず静かに安らいでほほんとしている事が一番だ。

道流、是你目前用底、与祖仏不別。祇麼不信、便向外求。

莫錯。向外無法、内亦不可得。你取山僧口裏語、不如休歇無事去。P.99 65節

諸君、わしが外には法はないと言うと、その真意を理解しないで、今度は内に求めようとする。さっそく壁に向かつて坐禅をし、舌で上の齧を支えてじつとして動かず、それを祖師門下の仏法だと思っている。大間違いだ。

大徳、山僧説向外無法、学人不会、便即向裏作解、便即倚壁坐、舌拄上齧、湛然不動、取此為是祖門仏法也。大錯。

P.109 70節

諸君、仏法は造作の加えようはない。ただ平常のままであ

りさえすればよいのだ。糞をたれたり小便をしたり、着物を着たり飯を食ったり、疲れたなら横になるだけ。愚人は笑うであろうが、智者ならそこが分かる。古人も、自己の外に造作を施すのは、みんな愚か者であると言っている。

道流、仏法無用功処、祇是平常無事。屙屎送尿、著衣喫飯、困来即臥。愚人笑我、智乃知焉。古人云、向外作工夫、総是痴頑漢。P.50 36節

わしの見地からすれば。なにもくぐぐしいことはない。ただふだん通りに着物を着たり飯を食ったり、のほほんときを過ごすだけだ。

約山僧見処、無如許多般、祇是平常。著衣喫飯、無事過時。

P.101 65節

このように当たり前に、何も特別なことなどなく普通に暮らして行けばよい、と説くのである。

さて、いままで見てきたように臨済が強調していたのは、「人惑」「自信」「馳求心」「向外不求」という用語に明らかのように、「自分の外に法・教えを求めな」という態度である。「自分の外に法はない」、「經典の文句は唯の言葉だけのものだ」。だから「自らを信じよ」

「外に求めるな」「他人の言葉に惑わされるな」と何度も繰り返して言うのである。つまり、臨済が強調しているのは、「自分を信じて行動せよ」、「他人に頼らないで自立的に行動せよ」という事で、今の言葉で言うと「自律的精神」を持って、「主体的に行動せよ」という事

を説いていると思われる。そしてこのような、主体的に行動したり、他人に惑わされずに行動するという事を認識する事が則ち、「在り方生き方についての自覚を深める」事につながると言えよう。

以上のように『臨濟録』を見てゆくなら、臨濟のこの主張は現在の我々にも納得できる主張であり、「在り方生き方についての自覚を深める」事と「主体的に追究」するということ、この二つの目標を達成するための公民科教材としてまさにうってつけの資料だと言えるだろう。

以上、「自律的精神の確立」と「主体的行動」という視点から『臨濟録』を読解すれば、その内容は、十分に公民科教材としての役割を果たす事ができる文献だといえる事については、従来は全く検討すらされていない資料であったため、今回敢えて公民科教育として教材化の可能性について一文を草した所以である。

注

(1) 本稿を起こすに当たっての、主な参考文献は以下の通りである。

『柳田聖山集』第四卷 法蔵館 2017

同 『臨濟録』 中公クラシックス 中央公論社 2004

同 『義玄』『中国思想史』上 ぺりかん社 1987

入矢義高 『臨濟録』 岩波文庫 1991

小川 隆 『臨濟録 ― 禅のことばと思想 ―』 岩波書店 2008

衣川賢次 『臨濟録テキストの系譜』

東京大学東洋文化研究所研紀要 162 2012

野口善敬他 『臨濟禅ハンドブック』 妙心寺宗務本所 2018

馬場紀寿 『初期仏教』 岩波新書 2018

石井公成 『東アジア仏教史』 岩波新書 2019

(2) 縁起説とは、「因」(直接的原因)と「縁」(間接的原因)とが関わり合って、「果」(結果)が生じるため、「因」と「縁」とがなくなれば、「果」も自ずからなくなると説く。この縁起説を踏まえて、四諦説が説かれた。

(3) 四諦とは、苦諦(生きることは苦しみである)・集諦(苦の原因は煩惱である)・滅諦(煩惱を消すことで苦が滅する)・道諦(八つの正しい実践により煩惱をなくすことができる)というこの世の四つの真理。

『高等学校学習指導要領解説』 公民編 文部科学省 2018年

柳田聖山 『訓注臨濟録』 大蔵出版 1972

同 『訓注臨濟録』 補訂版